

ロンドンとフィッツジェラルドの翻訳各1篇—作家の女性観を 垣間見る

森 孝晴, 平田ひかる

朝鮮からチャーミアンへの手紙 (2) ジャック・ロンドン著

ジャック・ロンドン著

森 孝晴 訳・付記

1904年2月24日, ソウルのグランドホテルにて

あと5分で北へと出発する。支度をして出発しようとしてパニックになっている。

荷運び用の子馬3頭

乗馬用の馬2頭

日本人通訳1人

朝鮮人コック1人

朝鮮人の馬丁2人

1904年3月4日, ピョンヤンにて

僕は、180マイル [約300キロ] の道を馬に乗ってここまでやってきた。帰宅したら君と少しは乗馬ができるだろう。なぜかっていうと、これから何か月にもわたって馬に乗らなければならないよだからさ。僕は朝鮮で最高の馬の一頭を持っているんだけど、それは、ロシア人の牧師から、彼がソウルを発つ前に譲り受けたものなんだ。

最近は何を書く暇がほとんどなくて『イグザミネー』誌に対しても十分に記事を書き送っていないような有様だ。旅のトラブルと死に物狂いで格闘しているような次第さ。

こここのところ、君やほかの誰からも便りが無い状況だ。

今、北へ向かっていて、まもなく安州に、そして鴨緑江に着くよ。目下、従軍記者や通訳や馬丁やそのほか何やかやの連中と交渉の真っ最中で、ものを考える暇もありません。いつ君にまともな手紙を書けるかもわからないんだ—何しろ時間がないんだ。

でも、馬については勉強中だよ—この二日間で一日に50マイル [約80キロ] 乗ったからね。鞍ずれして、ひりひり痛いよ。

僕は今、兵士でぎゅうぎゅう詰め状態の日本のホテルに滞在しているんだ。外国人はわれわれ

キーワード: ジャック・ロンドン, フィッツジェラルド, 翻訳, 手紙, 短編小説

三人だけ—イギリス人記者のマックラウドとアメリカ人カメラマンのジョーンズだけだ。ちょうど今2人のために、ウイスキーを注文しようとしているところさ。

1904年3月4日、

日本兵の寡黙さ、厳しさ、規律正しさについては、世界中でこれに匹敵するものを見つけるのは非常に困難だと思うね。アメリカ人の若者だったら、どこへでも気楽に出かけて言ったあげくに騒ぎを引き起こして、きっと我々は何度もそのことを聞かされる羽目になるだろうけど、そういうことは日本人には決して起こらないし、彼らがとても規律正しいのは素晴らしいことだね。だから、街には日本人を恐れる市民は一人もいないし、女性も、バーも、財産も、その他すべてのものが極めて安全だ。有名な事実だが、先の日清戦争では、あらゆる場面において日本軍は市民から供出させた物品に対しては対価を払ったし、今もこの方式を続けているんだよ。朝鮮の民衆の誰もが「もしこれがロシア兵だったら、どんなことになっていただろう？」って言うのを耳にする。僕は、ただの一人だって日本兵が酔っぱらって乱暴を働くのを見たことはなかったし、アレン将軍が日本の歩兵は世界のほかのどの歩兵よりも勝っていると言ったことから判断できるように、日本の歩兵隊はそれ自身完璧だね。実際、行軍中の彼らは一人一人が42ポンド〔約19キロ〕もの身の回り品を運んでいくのだけれど、きつい一言も聞かれない。誰も前かがみにならないし、体を曲げることもないし、倒れて一団から遅れを取ることもないし、誰ひとり肩ひもを結び直したりしないし、物品をきちんと身に着けていないことによって不快な音を立てて他の兵士の注意を引くようなこともしないし、歩兵隊の規律正しさと完璧さは、個々の歩兵の規律正しさや完璧さと全く同様なんだ。個々の歩兵に失敗は起こらず、作業に遅れも出ないので、彼らはまっしぐらに目的の完遂に突き進む。日本人は、本物の戦闘員を作り出せる人種で、日本の歩兵は全く素晴らしい。しかし一方で、僕が思うに、騎兵隊はまだ日本人がまだ慣れていない部門で、日本の騎兵隊は我々の目には奇妙なものに見えるね。日本の馬は小さいわりに強いけど、我々の馬とは比べものにはならないし、乗馬姿も全然似合っていないし、ほとんどの場合手綱も右手か左手一本で持つんだよ。馬はみな、調教されていない種馬で、したがって、馬同士がけんかを始めたら、日本人の手ではうまく制御できなくなるんだ。たとえば、2、3日前の話だけど、日本軍の馬がホテルの前でけんかを始めた時には、すったもんだしたあげくにアレン将軍が何とか馬を引き離すことができたけど、それが精いっぱいだったね。でも、日本兵もまた兵士だから、遠からず彼らは上等なロシアの馬を敵から奪って乗りこなせるようになるだろうし、それからは自分たちの馬の野蛮さでトラブルに遭うようなことはなくなる日が来る、と思うよ。

1904年3月8日、ポバル・コリにて

手紙ってというのは僕をすごく奮起させるね。おまけに、手紙を読むと自分が白人だってことを思い起こさせてくれるし、それを確認してほっとさせてくれるよ。

どんな日々を過ごしているかの例として今日のことを挙げよう。僕はピョンヤンで佐々木大将から出発を禁止されて、これまたいら立ちの種の通訳を介してこの件について議論しつくしたね。おかげで遅れに遅れて頭に来た。朝7時に出発したかったところだったが、ほとんど馬に荷物を積み始めることさえできずに、日本人の領事に呼びつけられたんだ—またまた通訳にうんざりし、頭が

混乱したけど、はったりをうまくかまして、午後遅くには解放された。

で、このさびれた村に到着したんだけど、村人たちは死ぬほどおびえているよ。すでにロシアと日本の兵士が通過していて、僕らが村人の恐怖心にとどめを刺したんだ。彼らは、我々の泊まる部屋も燃料も木炭も馬のエサも馬小屋も何もない—馬丁や通訳の食料もないと断言した。僕らは村を襲い、馬小屋に押し込み、ズボンの中に隠していた大麦を25ポンド取り上げたりなどなど、うんざりするような2時間を過ごし、頭がおかしくなるまでしゃべり閑談した。

これはこちらで過ごしたすべての日々のわずか一日に過ぎないんだよ。僕がこうして書いている時に、白人流の考え方なんて誰もしないのさ。馬たちが馬小屋の中で脱走しようとしてて—野生の馬は厄介者だからね—僕は長時間執筆を中断して馬丁たちを元気づけなければならなかったよ。

今日馬に乗っているときに鞍の上で君の手紙を読んで、君が僕の手紙を鞍の上で読んだことがあるのを思い出した。君のまたがった馬の名はベルだったね。今日僕が乗っていた馬の名もベルだよ。僕がそう名付けたんだ。僕のベルも君のベルと同じくらいかわいくて優しいし、朝鮮では唯一のかわいくて優しい馬だ。このメス馬はオーストラリア産のバルブ種の馬で、ソウルでロシア公使が持ってた馬だって話したことがあったかな？ 朝鮮にいるどんな馬—中国産や日本産や朝鮮産のどんな馬と比べても大きかったので、国際的な驚異の念と称賛を呼び起こしているよ。

こうやって書いている時、北から冷たい風が吹きつけてきているし、雪も吹き込んできている。また、僕の部屋のドアの前では、軍事物資を積んだ百台にも上る雄牛による運搬車がうなったり軋んだりして北に向かおうとしている。

僕の通訳が日々の報告をしに入ってくる。僕の朝鮮人料理人兼通訳のマンヨンギがお茶とトーストをもって入ってくる。ダンは缶詰半個分のホットポークと豆を注文した—まだまだ数知れない妨害があるだろう。

1904年3月9日水曜日、順安にて

順安に着いたけど、囚われの身であり、引き留められている。でも電信はこことピョンヤンやソウルの間でしっかり繋がっている。つまり、我々が安州へと北上することを許さない日本軍に囚われているという意味だ。そして、長々としたおしゃべりと延々と続く遅延の苛立たしい5分がさらに経過したというわけさ。

これを書いている間にも、一千人もの兵士がうちのドアの前を通り過ぎて進んでいきつつある。我が使用人たちは、軍から自分たちや馬たちの食料を手に入れるのに忙しい。

赤十字の子馬や開拓者たちや軍需品を積んだ荷馬や物資や歩いて進む兵士たちが流れるように通り過ぎていくよ。将校たちが握手をするために立ち寄り、名刺を置いて次々通り過ぎるんだ。

重要なこと。また別な苛立ち

アンダーシャツの上からヒトジラミにかまれちゃったよ。つまり、僕がそれを見つけてマンヨンギが取ってくれたんだが、その間ずっと彼は、朝鮮の高官がうちへきて15分ほど楽しく過ごさないかと申し出ていることを通訳してくれた。その高官は、シラミをとり、それから僕が着替えている間中ずっと見ていた。シラミはほくをすっかりおかしくしてしまったし、体中がかゆかった。常にたくさんのシラミが体に張り付いていたよ。いったいぜんたいどうやってイグザミナー誌や君に記事や手紙を書けというんだい？

ところで一僕のいるところから10フィート内で馬屋に入れられている馬たちがこのところずっと一蹴ったり、噛んだり、僕のベルや他の3頭の持ち馬を暴走させたりして一騒ぎを起こしているんだ。今は足でも折られたらたまったもんじゃない。僕は保険に入ると勧められたよ。

[ロンドン は下記の文書を同封している]

日本領事館, 1904年3月9日

ジャック・ロンドン殿,

拝啓,

命令により謹んで申し上げますが、佐々木少将の指揮下にある我が陸軍が北に向かうまではここにとどまってください。

敬具

(署名) C・珍上,

日本領事臨時代理

[ロンドン は次のように書いている]

これは僕が気にも留めないたくさんの文書の一つだよ。これは昨日平壤で発行されたものだけど、僕は今この町の北にいて、佐々木少将より先にいるんだ。

最初の命令に僕が従っていたら今日まで東京にとどまっていただろう。事実、ほかの50人の従軍記者たちはこの命令を心に留めていた。しかし僕は、偵察兵に進行を遅らされ平壤に連れ戻されるという覚悟はできていたんだ。でもこうしたことはすべてゲームさ。これほど先まで前進してきた記者は僕一人だけだよ。僕と同行しているのはコリアーズウィークリー誌のカメラマンのダンだ。平壤には別の従軍記者が二人いるけど、現在のところ朝鮮では普通の記者はそこまでが限度だね。

1904年3月11日, 順安にて

ベルに人ひと乗りして戻ったところだ一君には普通のことに思えるんじゃないかな? ベルに乗って100ヤードほど行って大股の駆け足で騒がしく駆け上がったところで、護衛の日本兵が慌てて出てきて僕に銃剣を突き付けたよ。これ以上先に進んではいけないという合図さ。東でも西でも南でも好きなところへ馬で行けるけど、戦闘が間もなく始まろうとしている北の方向には行けないんだ。あるいは、井上中将の許可がなければ進めないんだ。井上中将は12000人を抱える第12師団の団長で、ちょうどいま南に200マイル離れたソウルにいる。

7日前に受け取った君の2通の手紙はソウルから馬に乗せて持ち出したよ。手紙を書きながらドアから外を見ると、僕の座っているところから12フィートほどのところで、ベルが陸軍から僕がもらっておいた割り当ての大麦をもぐもぐ食べているのが見えるよ。ベルは全くのところ喜びを与えてくれる馬だね。僕は自分で自分に乗馬を教えているようなものだ。すべての乗り方が間違っているような学び方はしたくないね。でも、いずれにせよ、何とかしっかり乗ったままでいられるようになろう。そして、いつか二人で一緒に楽しく馬に乗ろう。

1904年3月12日，順安にて

僕の福利厚生のは心配しなくていいよ。日本軍はとてよく僕の世話をしてくれている。前線から40マイルの位置にいて、ここに滞在している。これほど遠くまでたどり着いた僕以外の唯一の従軍記者であるダンに戻って行ったよ。だから僕はすべての従軍記者の中で一番北に来た記者ということになるね。そのうえ、ほかの記者たちは今誰一人ピョンヤンさえ越えられない状態かもしれない。

[チャーミアンは、この手紙の用紙の上にごう書いている]

ジャックは中国人から聞いた短い詩をいくつか引用している—それから次のようなコメントも。「これらの詩は魅力的だ、そうじゃないか？ 朝鮮人の中であって僕が見てきた中では、唯一の魅力的なものなんだよ！」

1904年3月16日，ピョンヤンにて

ここで後ろ向きの動きが始まっている。僕はすでに順安からここピョンヤンへ50里戻るよう命令されていて、今またここからソウルへと540里戻るように命じられた—日本軍は僕たち従軍記者たちがどっと前進しスクープを捕まえようとするに対して僕らを躰けようとしている—日本軍はこういうことを、日本人の言うことに従って日本にとどまり、日本軍に僕らが先へ先へと進んでいい思いをしているんじゃないかと文句を言って、みじめな日々を送っている従軍記者のために、やっているんだ。

ソウルまでの540里の往復で1080里の無駄な距離を僕は馬に乗っていなきゃいけないんだ。さらに順安往復で100里、合計1180里の無駄だ。まあ、いずれにせよ、鞍に座っていることには慣れるだろうね。

1904年3月18日，ソウルにて

ちょうど今ここソウルに着いて、北に行くのはだめだということになって、明日の朝早くちょっとわきにひとつとびして、威海衛 [中国山東省の港町] に行こうとしている。どうもたくさんの手紙がピョンヤンで僕を探しているところをめぐっているらしいんだ。ここ1週間ほどで威海衛から戻るころには手紙を受け取れるだろう。

1904年3月29日，朝鮮，ソウルにて

第一縦隊に割り振られて、まだここソウルにいるよ。でも前線に行くのは許されてないけどね。前線には従軍記者は一人もいない。みんな日本軍によって引き止められていて、この件に関しては僕らはひどい扱いを受けてるね。

1年間以上はここにはいないぞと決心したところだよ。サンフランシスコをたった時から10か月たつから、ハーストに、前線でほくと交代してくれる人間を派遣してくれと電報を打つよ—その時に僕が前線にたどり着いてればの話だけだね。

ピョンヤンの北の順安から君に手紙を書いているので、ほかの誰からも1通も受け取っていないだけでなく、君からの手紙も全く届いていない。少なくとも君には、僕のみじめな手紙をイグザミナー紙に渡してもらいたい。自分のやってきたことにこんなにうんざりしたことはないよ。僕は完

全なる腐敗物になりかけている。こんなのは従軍記でもなんでもありゃしないし、ジャップは僕たちがいかなる戦争を見ることも許そうとしないんだ。同封した写真は今これを書いているテーブルのところで撮ったものだ。

1904年4月1日、朝鮮、ソウルのグランドホテルにて

依然として手紙は届かない。アジア人同士の戦争を見に行くことは決してないだろう。いらだちの種や遅延があまりにもひどい状況だ。僕は未だここソウルで拘束され、5頭の馬と通訳は仁川に留め置かれ、僕の装備一式はピョンヤンにあり、郵便物は安州にある—僕は何の活動もできず悲嘆に暮れている。こんな無活動状態、こんなイライラする無活動状態では手紙を書くことさえできないよ。

それでもね、不活発ながらも忙しうよ。何が心配かって、心配で忙しいのとなにひとつ成し遂げられていないってことがさ。ご心配なく、美しくかつ上手には乗れないかもしれないけど、一緒に過ごすこれから先の年月、乗馬では君にくっつき、ついていくと誓うよ。

今や僕は、(ポニーの中には凶暴な野獣もいるのだけど) あらゆる場所で、あらゆる鞍を乗せて、あらゆる種類の中国産のポニーに乗ってるよ。昨日も、あぶみなしで出かけて、別の男と一緒にゆったりと走って、いろいろな店を回り、混雑する通りや狭い通りやまがった通りを進み、寝そべってる赤ん坊の上を跨いだりしたんだ。だって、ポニーというのは、はみはきかないし、頑固だしで、すれすれひやひやだった。何とか生きてこの話を書いている。

ジェイムズ氏から受け取った手紙

この時は在インチョン

ロンドンへ、

君のメス馬とポニーはちゃんと世話されているよ。メス馬のほうが少しインフルエンザにかかっていて、もっとたくさんの運動が必要だね。ずいぶん太っているよ。

じゃあ君、さようなら。

早々、君のサワードウ仲間として。

(署名) ジェイムズ。

[ロンドンの通訳 K・ヤマダが補足]

あなた様が長い間お帰りにならないので、昨日トラブルが起きてしまいました。つまり、あなたに軍事機密を漏らしたとして憲兵に逮捕され、10時間も取り調べられた後、下宿に戻りました。電報を受け取りましたので、ご指示の通りにいたします。

Y.ff ly (「愛をこめて」か?!)

(署名) K・ヤマダ

あなたが戻られなければ、いろいろな問題が解決できません。

[ロンドンは、上述の通信について以下のような注釈をつけている。

同一の紙面にかかげられているこれらの手紙は、いくつかの僕のトラブルを暗示している。僕はここソウルにとどまることを強いられていて、馬は仁川に留め置かれ、通訳のK・ヤマダはその世話をしている。逮捕されたんだ。僕の気に入ってるメス馬はインフルエンザにかかり、ジェイムズが仔馬がかかるものと勘違いした「干し草腹病」で苦しんでいる。僕が厳しく禁止していた干し草だ、なぜって、メス馬への影響がわかっていたからだよ。(前のクロンダイカーである)ジェイムズに、仁川に向けて突き進むときに、僕が馬たちを見てくれるように頼んだんだよ。

1904年4月5日、朝鮮、ソウルにて

体の大きい活発な馬の騎手用の鞍に乗って、今ちょうど川べりを走りに行こうとしているところなので、もし僕らがお互いに殺し合わないとしても、地元の赤ん坊や目の見えない人々を殺しちゃうかもしれない。昨日この馬を一厄介なごくつぶし野郎を一連れ出して半ブロックほど歩かせて、あと6ブロックほどは制止し続けて、そこでやっとトイレに行ったんだ。どうやってその馬に乗ったまままでいたのかわからないが、日本人のように両手で手綱をつかんだりしなかったし、両腕を馬の首に巻き付けたりもしなかった。ああ、僕は今学習中なんだ、勉強してるんだ。今までの半生で僕はビリヤードさえ学んだことはなかったけど、今は学んでるんだ。ダンスも学んだことはなかったけど、この戦争がまだ続くならそれも学ぶよ—宣教師だけは踊らないけどね。そして、クレサン(朝鮮の踊り子だ)でさえ今は踊らない、なぜって皇帝の母君がなくなったからね。宮廷も喪に服しているよ。

明日の夜は、この地区のYMCAの依頼で外国人居住者たちに*Call of Wild* [原文のまま]の一節を読み聞かせることになっている—そして、なんと夜会服でやるんだぜ!!! この地方や僕の習慣からそうならざるを得なかったんだ。でも日本では、フロックコートを着てシルクハットをかぶらなきゃいけないんだよ—僕がプリンス・アルバート [のちの英国王。ここでは彼の流行らせたフロックコートのこと] を着てシルクハットをかぶっている姿を想像してごらん。それはともかく、もし日本がこの戦争に勝ったらジャップたちはとても生意気になるだろうから、白人は日本に住めなくなるだろう。

さて、馬に乗りに行ってください。あ、そうそう、「ジェイミー」っていう、朝鮮の新しい罵り言葉を覚えたよ。君がののしりたくなったら、いつでもやさしく「ジェイミー」って言ったらいよいよ、そしたらひとは君がののしているとはわからないだろうよ。

1904年4月16日、オペイ 朝鮮

再び馬に乗り、長時間進んだ。ぬかるんだ道で、昨夜の日が暮れるころにはベルは肩まで浸かっていた。朝食を済ませて6時にはもう出発していたが、今は午後9時半で夕食を済ませたばかりだ。疲れたので1分もたたないうちに寝てしまうよ。

1904年4月17日、安州ホテル

日本軍の司令部の連中と競走しながらなんとか進んでいるよ。僕の前に4人いるのだけれど、僕

のほうは荷物を抱えているというのに、軽やかに歩いているその4人に追いつきたいと思っているんだ。日本兵のほかの集団は後ろにいるよ。

馬に乗っている時間は素晴らしく長いし、ぬかるみもなかなかの代物だ。今日はベルには、一度ならず肩まで浸らせてしまった。

今すごく自慢したい気分だ。というのは、僕はベルに靴を履かせることもできるし、靴が緩んだらしっかり締めることもできるし、片方の靴が脱げたりなくなったりした時には履かせることだってできるんだ。もちろん靴を履かせるのはとても冷たい作業だけど、靴は役に立つんだ。とても役に立つんだよ。

1904年4月24日、義州

結局前に行く4人には追いつけなかったよ。4人が道のはるか後ろで歩を止めた時には一旦は追いついたんだけど、ここには一緒に着いたというわけさ。ここではしばらく休憩するよ。

さて、仕事の話だ。わかっていることだけど、マクミラン社は『海の狼』をこの秋に出版したいんだ。僕は校正原稿を読み返すことはできないよ。君が僕に代わってそれをやってくれなくっちゃ。僕はマクミランの人に手紙を書いてこのことを知らせて、君と連絡を取り合ってくれと頼むよ。まず最初に、『海の狼』が印刷に回される前に、彼らの持つる僕の元原稿を入手してくれ。この元原稿のかなりの部分がセンチュリー社の出版した部分では削られてしまっているだろう。カットされた部分を僕はマクミラン社版では復元したいんだ。一方で、多くの適切な修正が君やジョージ[スターリング*原注]やセンチュリー社によってなされたけど、その修正箇所はマクミラン版に入れたいね。

だから仕事だ。マクミランの原稿を入手して、センチュリーの出した版を読んだうえで、マクミランの原稿に適正な修正を入れてくれ。

君の気にさわることはすべてはねのけて、君の責任で変更してくれ。君は僕のことをよくわかっているんで、僕が不平を言わないことは知っているね。

1904年5月6日、日本の第一軍の司令部、満州

日本の第一軍における僕の立場が無意味なことと（この立場によって）まともな仕事が全くできないことで非常にイラついているけれど、体調は素晴らしくいいよ。自分が何を成し遂げてきたかと考えると恥ずかしいばかりだ。この数か月のイライラの報酬といえば、アジアの地理に詳しくなったこととアジア人の性格を理解できるようになったことだけだ。別の戦争で白人の軍隊に従軍したときにのみ、名誉挽回が望めるだろう。ここではそれを成し遂げるのは全く不可能なことだ。

1904年5月17日、日本の第一軍の司令部、鳳凰城、満州

これまでまともな仕事はしてこなかったよ。熱意もなくしたし、恥ずかしくない仕事をする希望もほぼなくなったね。名誉挽回をするための別の戦争が必要だ。そうなったら今度はアメリカ軍かイギリス軍に従軍したいな。いやいや、時はあっという間に過ぎるね。あと6週間でこの地に雨季がやってくる。チャンスがあるとすれば、どこか海外電報と接触できる場所を中国領内で探してこの状態から抜け出すことだ。

戦争前に手紙に書いた門司でのカメラの一件を除けば、イグザミナー紙が、僕が19本送った原稿のうち1本でも、何百枚も送った写真のうち1枚でも受け取っているのか、僕にはわからないんだぜ。

1904年5月22日、日本軍の第一軍の司令部、鳳凰城、満州

このところ、ものを書く気にならないんだ。できるのはただ待つことだけなんだ。君の所に戻りたくてしょうがないし、もうここにいるのはうんざりだ。戦争はどうなったって？ ばかばかしい！ 僕の日常生活をお知らせしよう。

美しい丘の斜面にある美しい松の木の森で野営をしている。近くにはお寺がある。夏のすばらしく晴れ渡ったお天気さ。僕は朝早く小鳥たちのさえずりで目を覚ますんだ。カッコーが夜じゅう鳴いてる。朝6時半に僕はひげをそり、朝鮮人のボーイのマンヨンギが朝食を作って僕を待っていて、通訳のサカイが僕のブーツを磨いて朝の指示を待っていて、中国人のユエン・ヒ・キーはいろんなことを手伝っている。ソウルで雇った使用人は普通朝食の準備や掃除を手伝っている。平陽で雇った下働きの連中は馬にエサをやったりしている。

7時に朝食。それからイグザミナー紙のために無から何かを絞り出そうと頑張る。たぶん外へ出て、写真を何枚か取る。でも、検閲官はそれが現像されずに外へ出ることを許さないから、僕もそれを送らないかもしれない。それに、僕はもう現像器具や化学薬品を持ち歩いてはいない。

僕は、一マイルほども離れていない鳳凰城の司令部に自由に馬に乗って出入りすることができる。また、半径一マイル以内なら町中を馬に乗って回る自由がある。いかなる戦争においても、従軍記者がこの戦争においてほどひどく扱われたことはない。ばかげていて、子供じみていて、こっけいで、愉快で、喜劇じみている。

午後には招集がかかり、我々（従軍記者たち）は、きれいな水が頭の上までたっぷり入っているすばらしいプールに泳ぎに行く。グレン・エレンのことを思い出すなあ。夜はキャンプファイアーだ。そこで我々は神を呪い運命を呪い、検閲官がいるのでここで触れることはできないが、何人かの人やいくつものものを呪うのだ。こうして一日が終わる。

うんざりだ。まったくうんざりだ。

本日イグザミナー紙に書き送ったところだ。多く見積もってもあと1か月か6週間ほどいたら、僕はこの地を抜け出してイグザミナー紙と直接海外電信がつながるところまで行くこと、この地における僕の身分は無駄なものだし、僕がここに居続ける理由もないこと、そして、僕がロシア軍側に移る手はずが整わないなら、イグザミナー紙が特別にここに残れと命じない限り、僕はアメリカに戻るだろうということ、を知らせたんだ。

1904年5月22日、

もはやイグザミナー紙が僕をロシア軍側に行かせる手はずを整えることは不可能だと思うから、君がこれを読んでいるころには、僕は合衆国へ、神の国へ、ホイットマンの国への帰路についていることだろう。誰にもわからないことだ。誰にわかるだろうか？ とにかく、本当だよ、日本や瀬戸内海で過ごした日々は、静かに終わってしまった。僕を説得して日本での日々を費やさせたほうが、身銭を切りつつ今もらっているはるかに少い収入より、何倍も多くの給料を取れるんだけどね。

過去に僕は「経済的黄禍論」ということを説いてきたけど、これからは「軍事的黄禍論」を説いていくよ。

そして、検閲官がこれをすべて読んでいるところを、それから僕が今書いているこの部分を読んでいるところも想像してごらん。一字たりとも、一行たりともわかりはしない。何が起こってるかなんて僕にはわからないよ。

僕があまり手紙を書かないとしたら、それは書けないからさ。絶対に、気力もないし、頭も働かないし、体力もない。奇妙なことに健康体だが、精神的にはひどく病んでいるよ。次にどこか中国の港から電報を打つときには、こう言うだろう。「ただいま」

From *Jack London Reports* (1970). New York: Macmillan

付記

ジャック・ロンドンの描く女性は基本的に存在感があり、その描き方はまなざしがやさしい。彼は一度離婚を経験し、チャーミアンという女性と再婚するが、彼女を「同志」と考え、実際に旅に出るときも常に一緒に同じ経験や苦勞をした。また、手紙の内容からもわかるように、チャーミアンはロンドンの執筆においても秘書のような、あるいは編集者のような重要な役割を果たした。なかなか文才もあったようで著書も残しており、ロンドンの絶筆である *Cherry* が未完であったため、彼の死後に彼の構想を引き継いで続きを書き完結させている。

1904年の日露戦争の取材時には、さすがに最前線にはチャーミアンを連れていくことはできずに置いて行っているが、その数か月間におびたしい従軍記録とともに彼女に多数の手紙を書き送っている。そのこと自体がチャーミアンへの愛情を示しているとともに、従軍記の内容にも重なる鋭い指摘も書き込まれている。時に彼女に弱音を吐いたりもするし日本軍への不満も漏らすのであるが、そこには本音が垣間見えるわけで従軍記の内容と併せて考えるととても興味深い。

ロンドンの女性観という視点で見てもこの書簡群は面白い。ロンドンまさにチャーミアンを同等の相手として扱い、語りかけている。時にユーモアで軽い会話を楽しむが、それは厳しい従軍生活の中で彼女を恋しく思う本音の部分だ。しかし、日本軍や日本兵について彼女に語る時、ロンドンは異文化を共に考えてみたいというような議論の相手としても彼女を位置づけていると思われる。彼女の知性を認め、そこには女性を見下すような様子は見られない。ロンドンの描く女性には、知性的な人間であったり、労働者階級の苦勞している人間がよく出てくるが、そこには、知性的であることの魅力や罪のない人間の苦しみへの同情が描かれている。

「冬の夢」

F.S. フィッツジェラルド著

平田 ひかる 訳・付記

1

キャディーの中には罰を受けたかのように貧しく、表の庭にいる弱った牛たちと一緒にたった一部屋で暮らしている者たちもいた。一方、デクスター・グリーン之父はブラックベアーで2番人気のスーパーマーケットを経営していた。その町で1番人気だったのは「ハブ」と呼ばれる店で、シェリーアイランドの富裕層に愛用されていた。デクスターはキャディーの仕事をたかがポケットマネーのためだけにやっていた。

秋になると、身の引き締まるような寒さのため、あたり一面は灰色に覆われる日が続いた。長いミネソタの冬は、白色の蓋をかぶせたかのように霧が垂れ込めていた。デクスターのスキー板は、ゴルフ場のフェアウェイを隠している雪の上を移動していた。この時期の町の雰囲気はデクスターに深い憂鬱さをもたらしていた。オフシーズンになると、ゴルフ場は野生のスズメたちがよく来て荒らしていき、休耕地のようになってしまうので、デクスターは不快感を抱いていた。夏に派手な色合いを見せていた木々があった場所も、冬となった今は、膝の深さまであるゴルフ場のサンドボックスが固い雪に覆いかぶさされているだけだった。彼が丘を横切ろうとするときに、無残にも冷たい風が吹いた。そして、消えゆく夕日の光をまぶしく感じながら、すたすたと歩いていった。

4月になると、冬は突然終わった。雪は、ブラックベアー湖へと溶け落ち、冬にゴルフをするという赤と黒のボールを持ったゴルファーたちを待とうともしなかった。高揚感もなければ、しめっぽさの恵みを与える合間もなしで寒さは去っていった。

デクスターは北部の春がなんだか憂鬱なものだということを知っていたし、同時に秋が彩り豊かだということも知っていた。秋は、彼の手をしっかりと握らせ、彼にばかげた独り言を繰り返させていた。そしてデクスターに、想像上の聴衆や軍隊に命令するようなしぐさをさせるのだ。10月は、11月に勝利の喜びで舞い上がらせるようなことになるという希望で満ち溢れさせた。そのような気分のシェリーアイランドの夏のはかなく鮮やかな印象が、デクスターに製粉所で粉を引く用意をさせた。彼はゴルフチャンピオンになった。そしてついに、想像上のフェアウェイを超えて数多くのマッチで何百回も試合をし、時々彼は笑いが出るぐらいに容易に勝利し、時には驚くぐらいに勝利した。そして再びピースアローの自動車から駆け下りて、モーティマー・ジョーンズのようにシェリーアイランドゴルフクラブのラウンジへと向かっていった。

ある日、あのジョーンズ氏がゴルフ場にやってきた。彼自身であってゴーストではなかった。涙を目に浮かべデクスターのもとにやってきた。そしてデクスターに向かって、彼がクラブで一番のキャディーだったと言い、ジョーンズ氏は、やりがいがあるならやめるといふ決断にはならないだろう、だってクラブにいる他のキャディーは普通、1回のホールで一つのボールをなくすのだから、と言ってきた。

「そんなことはないですよ、旦那様」

デクスターは断固として言った。

「もうこれ以上、キャディーはしたくないんです」

少し間を置いて、

「僕はもう年を取りすぎているんです」

「君は14歳にもなっていないじゃないか。なんで神様は今朝になって君に辞めるという決断をさせたんだ。私と一緒に来週の州のトーナメントを回ると約束してくれよ」

「僕は年を取りすぎているんです。もう決めたことなんです」

デクスターは「Aクラス」のバッチを手渡し、キャディーマスターから彼が受け取るのに正当な支払いを受け、ブラックベアー湖へと歩いていった。

「今まで出会って来たキャディーの中で一番だよ」とモーティマー・ジョーンズは午後の酒場で声を上げた。

「一度もボールをなくしたことがないんだ。この仕事を快くやっていたんだ！賢いんだ！物静かなんだ！正直者で、とにかく素晴らしいんだ！」

このような状況を引き起こした少女は、11歳だった。少女にしては醜いほどに美しく、言い表せないほどのかわいらしさと多くの男性に限りない苦痛をもたらす、そんなことが数年後に運命づけられているようである。しかしながら、彼女の放つ輝きは見えてわかるものだった。彼女は笑みを浮かべるとき、決まって口角をくいと下げる、こんな方法は一般的には不信感を抱くことだった。これは大変なことになるぞ！それに、彼女の目は実に情熱的なものだった。生命力がそんな類の女性には早くも育まれていたんだ。今は完全に証明されていて、一種の輝きが彼女の細身を通じて輝いていた。

彼女は熱心にも白いリネンを来た乳母と一緒に午前9時にゴルフコースに出てきた。乳母が抱えている白いキャンバス生地のゴルフバックには5本の小さなゴルフクラブが入っていた。デクスターが初めて彼女を見た時、彼女はキャディーハウスのそばに立っていた。というよりむしろ、落ち着かない様子で、乳母との明らかに不自然で驚くほど着飾った会話や、彼女には似合わないしかめっ面で、そんな気持ちを隠そうとしていた。

「まあ、とってもいい日ね。ヒルダ」デクスターは彼女がそういうのを聞いた。

彼女は口角をくいと下げ、微笑み、迎りをひそかに見渡した。そして、彼女の目が一瞬、デクスターへと興味を移した。そして、乳母に向かって

「あらまあ、ここには今朝はそんなに人がいないみたいね。いるかしら？」

また微笑んで、見るからに幸せそうで、でも明らかに不自然で、いかにももっともらしかった。

「私たち、今、どうしたらいいかわからないわ」特にどこを見渡すというわけでもなくあちらこちらを見ている乳母に向かって言った。

「ええ、その通りですね。私がどうにかいたします」

デクスターは口をわずかに開けたまま、身動きせずに立っていた。彼には、仮に少しでも動いてしまえば、自分の存在が彼女の視界に入ってしまうだろうということがわかっていたのだ。そして、たとえ自分が後ろのほうに動いたとしても、彼は彼女の顔がよく見えなくなってしまうということもわかっていた。今になって、彼は去年、何度か彼女のことを見かけたことがあったことを思い出

していた。彼女は、ゴルフズボンを履いていた。

突然、不本意だったが笑ってしまった。そう、一瞬、突然、笑ってしまったのだ。そして、彼のほうをちらっと見たので、デクスターはくるっと振り返り、足早に歩き始めた。

「ボーイ」

デクスターは立ち止った。

「ボーイ」

間違いなく、デクスターは話しかけられたのだ。そればかりでなく、彼は、滑稽な、ばかげた笑みを向けられた。こんな思い出は中年になっても忘れられないだろう。

「ね、あなた、ゴルフの先生がどこにいるか知ってる？」

「彼は今、レッスン中ですよ」

「あら、じゃあ、キャディーマスターはどこにいるの」

「キャディーマスターも今朝はここにはいませんよ」

「あら・・・」

いっときの間、この言葉が彼女を困惑させた。彼女は足を交互に動かしながらその場に立っていた。「私たち、キャディーをつけたいんです」と乳母がいい、加えて「モーティマー・ジョーンズ婦人がゴルフをしてくるように私たちを送りだしたものですから、キャディーなしにどうしたよいかわかりませんのよ」

ジョーンズお嬢様からの不吉な視線で、彼女は話すのをやめた。そして続けて即座に微笑みを浮かべた。

「僕以外、ここにキャディーはいません」

デクスターは乳母に向かっていった。

「僕はキャディーマスターがここに来るまで、キャディーとしてここにいなければならないのです」

「そうなのね」

ジョーンズお嬢様と彼女の付き人はやっと視線をそらし、そして、デクスターとのふさわしい距離を置き、さらに会話が熱を帯び、複雑になった。それはジョーンズお嬢様がゴルフクラブを一本取り出し、激しく地面にたたきつけたことで終結したのだった。さらに彼女はゴルフクラブを再び振り上げ、素早く乳母の胸近くまで振り下ろした。そうすると、乳母はクラブをぐいっとつかみ、お嬢様の手からひねりとったのだった。

「本当に最悪」ジョーンズお嬢様は声を上げた。

他にも不平不満がこぼれてきた。喜劇的な要素がこの場に隠されているということに気づいたとき、デクスターは思い思いに笑ったが、この笑いが聞き取られる前にどんな時でも笑いをこらえようとした。デクスターには、この小さなお嬢様が乳母をたたく行為が正当化されることにばかげた確信をもつことはできなかった。

この状況は、思いがけなくも、乳母にすぐにアピールをしてきたキャディーマスターの登場で解決されたのだった。

「ジョーンズお嬢様は、かわいいキャディーをお付けになるつもりのような感じだったけれど、この子、一緒に行けないといひますの」

「マッケンナさん、私はここであなたが来るまで待っていただけです」デクスターはすぐに返答し

た。

「さーて、やっとキャディーも来てくれたわ」ジョーンズお嬢様は、キャディーに対して微笑みかけた。そして、バックを落とし、ティーアップをするところまで気取って小股で歩いていった。

「それで？」

キャディーマスターはデクスターの方へ振り返った。

「なんで君はマネキンみたいに突っ立っているんだ？べっぴんさんのクラブを持ってあげるんだ」

「今日は一緒にゴルフはまわらないんです」

「君は行かないのか・・・」

「僕は辞めるつもりなんです」

デクスターの決断の非道さが、彼自身をひどく驚かせた。デクスターは売れっ子のキャディーだった。夏場になって1か月当たり30ドルも稼ぐなんてことは、湖畔の周りのどこかほかのところでできるようなことではなかった。しかし、彼は強い衝撃を受け、動揺も凄まじいもので、すぐに激しいはけ口を求めたのだった。

そんな簡単な話でもない。将来的にたびたびそうなるかもしれないのだが、デクスターには彼の冬の夢が無意識に決定づけられていたのだ。

2

今はもちろん、これらの冬の夢の本質や冬らしさは変わってしまったけれど、冬の夢の内容は相変わらずだった。冬の夢はデクスターに何年か後に州立大学のビジネスコースを見送らせることを納得させた—彼の父に関して言えば、今は事業が繁盛しているので、デクスターが選ぶ道には投資してくれる予定だった—それは、東部で最も古くて有名な大学であるというあてにならない利点のためだった。だが東部ではデクスターは資金不足であるということが悩みの種だった。こんなことに左右されてはいけないのだ。というのも彼の冬の夢は、たまたま最初は金持ちのことを考えることに関係していたからなのだ。これは、単に男の子の上級気取り以外のなにものでもないのだ。彼は煌びやかなものや人とつながりを持ちたくなかったのだ。時にデクスターは、自分がそれをした理由もわからずに最高峰に手を伸ばしていた。時々、彼が人生をほしのままにする不思議な拒絶感と戒めにぶつかる 때가 あった。この物語はこれらの戒めの一つであって、何もデクスターのキャリアに関する ことではない。

デクスターは金儲けをした。それは驚くべきことだった。大学卒業後、彼はブラックベアー湖から裕福な後援者に引き寄せられるように街へ出向いた。彼はまだ23歳で、そこにまだ2年ぐらしかいなかったとき、そこにはもうすでに「それでこそ若者だ」と好んで言う人がいた。彼の周りにいる裕福な家庭の息子たちは、危なっかしくコネでつながりを広めていること、不安定な世襲財産を使っていること、もしくは、「ジョージワシントンコマーシャルコース」で使った24巻分の知識をこつこつと実践しているのだった。しかし、デクスターはカレッジディグリーと饒舌を活かして1000ドルものお金を借りて、洗濯事業の共同経営権を買ったのだ。

彼が事業を始めた時は、小さな洗濯屋だった。だがデクスターは、イギリス人が羊毛のゴルフストッキングを縮めることなく上手に洗う方法を知っていたのだ。一年のうちで彼はニッカーボッ

カー¹を履いているニューヨーク市民もお客として迎えるようになった。人々は、シュトランドの靴下やセーターを彼の洗濯屋に預けるように依頼した。それはあたかもゴルフボールを見つけられるキャディーを要求しているようだった。しばらくして、彼は奥様方の下着類も上手に洗濯をこなすようになった。そして、町の異なる場所で5店舗も経営していた。27歳になる前に、彼はアメリカの洗濯業界で頭角を現していた。そして、店を売り払い、ニューヨークへ出た。しかし、私たちに影響する彼の物語の一部は、デクスターが最初の大きな成功を成し遂げた日々に戻るのだ。

デクスターが23歳だった時、白髪で「それでこそ若者だ」と好んで言っていたハートさんは、週末にシェリーアイランドゴルフクラブへ行く招待状をデクスターに渡した。彼は一日分だけ登録し、午後に、ハートさん、サンドウッドさん、T.A.ヘドリックさんとフォーサム²でゴルフをした。デクスターは彼がかつてハートさんのカバンを同じリンクで持ったことや、目を閉じていてもすべてのトラップや溝がわかるということを使う必要性について深くは考えなかった。だが、彼は気が付くと彼らの後に付いて回る4人のキャディーをじっと見て、目を光り輝かせたり、自分を思い出させるための身振りをしたりすることで、自分の現在と過去の間にあるギャップを埋めようとしていた。

奇妙な一日だった。はかなくも突然過ぎ去っていき、よく知った印象を残した。一分間、自分が浮いている感じがした。次の瞬間、彼は凄まじい優越感を味わった。その優越感は、デクスターがT.A.ヘドリックさんに向けて感じたものだった。T.A.ヘドリックさんはずまらない人で、いいゴルファーでもなかった。

そうして、ハートさんが15ホール目でなくしたボールのおかげで、素晴らしいことが起きたのだ。4人がデコボコの堅い芝生を探しまわっているとき、「フォー！」と彼らの背後の丘の方からはっきりと声が聞こえた。そして、4人はすぐさまボール探しから振り返ると、ピカピカのボールが突然、丘を越えて、利き腕の方へと飛んできて、ヘドリックさんが自分の腹部で受け止めたのだ。「なんてことだ」T.A.ヘドリックさんは金切り声をあげた。「ゴルフ場の人は、この手の頭のおかしい女性はコースから外してしまうんだ。本当に恥知らずな奴だよ」

頭と声が丘を越えてきた。

「お先に行ってもいいかしら」

「君。私の腹に当たったんだぞ！」

ヘドリックさんは激しく声を上げた。

「私、そんなことをしたかしら」

その女性が男性グループの方へと近づいてきた。そして、彼女はボールがまともに通るはずだった方向をじっと見ていた。

「私のボール、はねてラフ³に入っちゃったかしら」

この質問が正直に言っているのか、意地悪なのかどうかを決めるのは不可能だった。しかし、いつかして、何の疑いもなしに、彼女のパートナーに丘を越えてこちらに来るよう、元気よく声を上げた。

¹ 膝下で袖口をしぼった、ゆったりしたズボン。登山・ゴルフなどに用いる。ニッカーズ。

² ゴルフで、4人が2人ずつの2組に分かれ、各組2人が一つのボールを交互に打つ競技方法。

³ ゴルフで、コース内のフェアウェイやバンカーなどの周囲にある草地。

「こっちよ！なんか当てちゃったみたいだけど、それ以外はうまくいっているわ」

彼女が短いマシー⁴を打つ格好をしたとき、デクスターは彼女をまじまじと見た。その女性は、青いギンガムのドレスを着ていて、日焼けを目立たせるような広い淵飾りが喉から肩にかけて縁取っていた。誇張や貧弱さの質、それは彼女の情熱的な目や11歳の時の理性に反するような口角をくいと下げた口から今はもう去っていた。彼女は目立って美しかった。頬の色は絵に描いたような色味を帯びていた。その色は強い色ではなかった。でも、ある種の動揺と熱を帯びた興奮が隠されていたため、今にも遠ざかったり、消えたりしそうだった。この色合いと彼女の口元の動きやすさは、不安定で、強烈な生命、それに情熱的な活力という連続的な印象を与えた。ただ部分的に、彼女の目の奥にある悲しそうな贅沢さがただ不十分なままでバランスを保っていた。

彼女は我慢できずに、何の興味も持たずにマシーを振り下ろした。すると、ボールはグリーンの向こう側のバンカーへと入った。素早く、不真面目なほほえみを浮かべながら軽率に「どうもありがとう」と言って、彼女はボールの後を追っていった。

「あれはジュディー・ジョーンズだ」とヘドリックさんは次のティー⁵で言った。その間、いつきだったが、彼女が先に打つのを待っていた。

「彼女に必要なことのすべてってというのは、こっちに姿をみせて、6か月間平手でお尻をぶたれること、それに、流行遅れの騎兵長官とでも結婚すればいいんだよ」

「なんてことを。彼女は顔立ちがいい感じじゃないか」と30歳を超えたばかりのサンドウッドさんは言った。

「いい顔立ちだって！」ヘドリックさんは軽蔑して金切り声をあげた。「彼女はあたかもキスしてほしそうな顔をしているじゃないか。町ですべての子牛に対して牝牛が色目を使っているような感じじゃないか」

ヘドリックさんが母性本能について言及しようと思ったのかどうかは疑わしかった。

「彼女はやろうと思えばかなり上手にゴルフができるよ」とサンドウッドさんは言った。

「型がなってない」ヘドリックさんはまじめくさって言った。

「彼女はいい容姿じゃないか」とサンドウッドさんは言った。

「彼女のボールが速いボールじゃなかったことがせめてもの救いだな」と言うと、ハートさんはデクスターに向かってウイंकをした。

午後遅くになると、金色の渦を巻いたように溢れた陽が落ち、青や緋色に変わりながら、乾いた空気だけが残り、中西部の夏の夜はカサカサと音を立てていた。デクスターはゴルフクラブのベランダからじっと見ていた。わずかに吹く風の中での池の水の重なり合いさえも見ていた。その水面は満月の下で銀色のきらめきを見せていた。すると、月が自分の唇に指をかざすようにして、静かにしなさいというサインを出した。そして、湖は淡くて静かで、透き通ったプールになった。デクスターは水着を着て、最も遠い飛び込み台のほうに泳いでいった。そこで、彼は濡れたキャンバス地の飛び板の上で水を滴らせながら手足を伸ばした。

魚が飛び跳ね、星が瞬き、池の周りの明かりがピカピカと光っていた。暗闇の向こうにある半島では、ピアノが今年の夏、いやもっと前の夏を思い出させるような音色を響かせていた。「チンチ

⁴ 5番アイアン。ゴルフで用いる、頭部がやや扁平な金属製のクラブ。

⁵ ゴルフで、第一打を打つ場所。ティー・グラウンド。また、ボールをのせる台。

ン」や「ルクセンブルク伯爵」,「チョコレート兵士」などの曲調と、水面を張って聞こえてくるピアノの音はいつもデクスターには美しく聞こえていたので、彼は横たわったまま、静かに聴き入っていた。

その時間聞こえてきたピアノの調べは、明るく、そしてデクスターがカレッジの2年生だったときよりも5年も前に聴いたものだった。そのピアノの調べは彼が卒業パーティーに贅沢をする余裕がないとき、プロムでひとたび聴いたことがあった。その時彼は体育館の外でたたずみながら聴いていた。音の調べは、彼にある種の恍惚感をもたらし、その恍惚感はこれから彼に何が起こるのかを考えさせたのだった。その調べは、激しい批評の気持ちであり、この時限りは、デクスターが堂々として命と調和する感覚でもあり、それに彼のすべてが、輝きや今後知る由もない魅惑を放っていた。

低くて白い長方形のものが、競争用のボートの音を鳴り響かせながら前方へとパタパタとさせながら半島の暗闇から突然こちらのほうに向かってきた。水を分けている二つの白い吹き流しがモーターボートの後ろで波をうち、ほとんど即座にボートは彼のそばにやってきたので、ボートの単調な低音でピアノの温かい音色がかき消された。デクスターは自分の腕で立ち上がると、舵輪に立っている姿に気付いた。水を超えて、彼のほうを凝視する二つの黒い目があった。ボートは通り過ぎて、湖の中心を大きく、無意味にも何度も何度も円を描きながらさっと進んでいった。均等に変哲な円を描いた時、水平運転に戻し、飛び込み台のほうへと戻っていった。

「だれなの？」彼女はモーターを止めて呼びかけた。彼女はかなり近くまで来ていたので、デクスターは彼女のピンクのロンパース⁶でできている水着をはっきりと見る事ができた。

ボートの鼻先が飛び込み台にぶつかり、後ろのほうがどんどん傾いたようになり、デクスターは彼女のほうに真っ逆さまに落とされた。興味の度合いは異なったけれど、彼らはお互いの存在に気付いていた。

「今日の午後まで一緒に遊んでいた人のひとりじゃないの」と彼女は尋ねてきた。

そう、彼女の言う通りだった。

「ねえ、あなたはモーターボートの運転の仕方を知ってる？もしあなたができるって言うなら、あなたがこのボートを運転してくれたらなって思っているのよ。そうしたら私は後ろでサーフボードに乗れるから。私の名前はジュディー・ジョーンズっていうの」彼女はデクスターに対して作り笑いの笑みを浮かべながら好意を示してきた。それどころか、作り笑いをしようとする、彼女がかつてそうだったように口角がぐいと上がっていたし、その笑みはグロテスクなものではなく、単に美しいものだった。「私、島の向こう側に住んでいるの。家には私を待っている人がいるの。彼がドアに立ち寄ったとき、私はドックに出るのよ。だって彼、私のことを理想の女性だって言うんだもの」

魚は飛び跳ね、星がキラキラと輝き、湖の周りの光は瞬いていた。デクスターはジュディー・ジョーンズのそばに座った。彼女はボートの運転の仕方を説明してくれた。すると、彼女は水の中に入り、しなやかにクロールをしながら、浮いているサーフボードの方へと泳いでいった。小枝が水面に浮いていたり、カモメが飛んでいたりするのを見ながら、デクスターは彼女のことを見ない

⁶ 袖なし上着と脚部のない短いパンツとをつないだ主に乳児、幼児の遊び着。素材は伸縮性に富んだジャージが中心。また、これに似たデザインの婦人服のこともさす。

ではいられなかった。彼女の腕は、バターナッツ⁷のように焦げ茶に焼けた肌の色だったが、彼女ははっきりとしない白金色の小波の間をしなやかに泳いでいった。肘は素早く水面から現れ、水の中に入っていくリズムも前腕をポンと放り投げるようにしていた。そして腕を伸ばしたり沈めたりして、前方へと突き進んでいった。

二人は湖の方へとすばやく移動していた。デクスターが振り返ると、傾いたサーフボードの後部でジュディーがひざまずいているのが見えた。

「もっと速く！」彼女は叫んだ。

「できるだけもっともっと速く」

素直にレバーを前へと押し込むと、船首では水しぶきがあがっていた。彼がもう一度、サーフボードの上にいるジュディーを見た時、彼女は腕を大きく広げ、視線は月の方へと向けていた。

「ひどい寒さだわ」彼女は声を上げた。

「ねえ、あなたの名前はなんて言うの？」

デクスターが自分の名前を告げると彼女は、「明日の夜、私のところで一緒にディナーをしない？」

彼の心拍数は一気にあがった。ジュディーの気まぐれで人生が変わる、そんな二度目の経験だった。

3

翌日の夕方、デクスターは、階段の下でジュディーが降りて来るのを待っている間に、ジュディー・ジョーンズをもうすでに愛してしまっていた男たちと一緒に、穏やかな真夏の部屋やそこから開いているサンポートにいた。彼にはその手の男たちが、デクスターが大学に入った時に、上品な服を着て夏場に健康的な日焼けをしている大学予備校から来たやつらだとわかったのだ。デクスターはやつらのことをずっと前から知っていたし、ある意味、自分のほうがそんなやつらよりもっと男らしいと思っていた。デクスターは新入りで、やつらよりも強い男だった。でも、自分に子供ができれば、子供たちにはやつらようになってほしいと願っていることを認めざるを得なかったし、彼は、そんなやつらが下品で、でもいいとこのおぼっちゃまだということを認めていた。

デクスターがちゃんとした服を着るようになった時には、彼もアメリカで一番いい洋服屋を知っていたし、それにその店がデクスターのために今夜の洋服を仕立ててくれたのだ。彼は自分の大学では他の大学にいる時とは違った特有の控えめな部分を持っている必要があった。何か特徴がある人こそ価値があるのだと気づいた。彼にはもうその特徴があったのだ。デクスターが服装やマナーについて気にかけることは、他のどんなことを気にかけるよりも、もっと自信のいることなんだということも知っていた。しかし、この無頓着さは将来の子供のためだった。デクスターの母の名前はクリームスリッチという名だった。彼女は百姓階級のボヘミアン⁸で、最期までくだけた英語を話していた。彼女の息子は模範を保たなければならなかったのだ。

7時過ぎになって、ジュディー・ジョーンズは階段を下りてきた。彼女はブルーのシルクのアフタヌンドレスを着ていた。彼女はもっと手の込んだドレスを着ているものと思っていたので、デ

⁷ バターナッツは南アメリカ大陸が原産とされるもので、アメリカで人気なカボチャのひとつ。ひょうたんのような形をしていて、下の膨らんだ部分に種がある。果皮は肌色から黄褐色で、熟していくとオレンジ色になっていく。

⁸ 社会の規範にとらわれず、自由で放浪的な生活をする人。

クスターはがっかりした。この気持ちが強くなった時、簡単な挨拶を交わすと、彼女は執事のいる食器室のドアのほうへ行き、扉を開けて「お食事にしてちょうだい、マーサ」と言った。彼はそんなことをするよりむしろ、執事が食事の案内をして、もう食前酒が用意されているものだと思っていたのだ。デクスターはそんな自分の考えは脇に置いて、ジュディーとラウンジに並んで座り、お互いに見つめ合った。

「パパとママはここには来ないわ」とジュディーは考え込んだように言った。

彼は彼女の父親を見た最後の日のことを覚えていた。デクスターは、両親が今夜ここに来ないことが嬉しかった。というのも、二人は自分のことを誰だろうかと疑うに違いないのだ。デクスターはミネソタの北部から遠く50マイルほど行ったキーブルという場所で生まれた。彼は自分の実家であるブラックベアー村と言う代わりに、いつもキーブルと言っていた。田舎町は、不便なところがなく、上流階級向けの人工池の足元の腰掛けとして使われていなければ、十分に暮らせる町だった。

二人はデクスターの大学の話をした。この大学には、ジュディーもここ2年間で頻繁に訪れていた。それに、近くの都市のシェリーアイランドにいるごひいきさんの話やデクスターが来年には繁盛しているかどうかという話までした。

夕食の間、彼女はデクスターを不安な気持ちにさせるような、不機嫌で憂鬱そうな感情を表に出してきた。彼女がしわがれ声で口に出すどんな癩癩でも彼を不安な気持ちにさせた。ジュディーがデクスターや臆病者に微笑み返しても、あるいは何もしなくても、彼女の微笑みは陽気や喜びでさえも根柢のないものにして、デクスターの心をかき乱していた。彼女のスカーレット色の唇と口角がくいと下がった時、それはキスへの誘いというよりもわずかな笑みだった。

夕食の後、ジュディーはデクスターを暗いサンボーチに連れていき、あえて雰囲気を変えようとした。

「ちょっと泣いてもいい？」彼女はそう言った。

「僕は、君が僕のことをつまらないやつだと思っていないか心配だよ」とすぐに返事をした。

「そんなことないわ。私はあなたのことが好きよ。でもね、ただ今日の夕方はひどかったってだけよ。私が気になっている男の人がいたんだけど、今日の午後、彼ったら私に、自分は教会に住むネズミみたいに貧しいんだって不意に言うのよ。そんなことをこれまでにそれとなく言うことなんてなかったのよ。ひどく平凡な話だと思わない？」

「きっと、君に言うのが怖かったんだよ」

「そうだったようね」と彼女は答えた。

「そもそもの始まりが間違っているのよ。あなたならわかるでしょ。私が彼のことを貧乏だって思っていたら、そうね、私はたくさんの貧乏な男たちを好きになって、完全に彼らと結婚していたかもね。だけど、今回の場合は、彼がこんなことになるなんて思わなかったわ。それに、彼への私の興味関心っていうのはショックを残すほど強いものではないわ。あたかも女の子が冷静に彼女のフィアンセに自分が未亡人だと伝えるようなものだもの。彼が未亡人を嫌うことはないかもしれないけどね・・・」

「さあ、始めましょう」彼女は突然話題を変えた。

「ところであなたはどちら様」

一瞬デクスターはためらった。そして

「何者でもないよ」と言った。

「僕のキャリアっていうのは主として将来に関わってくることだね」

「あなた、貧乏なの？」

「いや」

彼は率直に答えた。

「僕は、おそらくノースウエストの同世代の男性よりもはるかに大金を稼いでいるよ。僕はこれが気に障る発言だってわかっているけど、君が僕に話を変えるように言ったんだ」

間があった。すると彼女は微笑んで、口の両端を下げ、ほとんど気付かない程度に体を左右に揺らしながらデクスターの方へと近づいていき、彼の目をのぞきこむようにした。得体のしれない塊がデクスターの喉を上がってきて、その実験を息を殺して待ち、神秘的に唇という要素から形づくられる気まぐれな化合物に相対した。そして、デクスターは見たのだ—彼女は彼に対して自分の興奮を惜しげもなく、かつ深いキスで伝えた。それは約束ではなく実行のキスであった。ジュディーのキスは、彼の心の中に、再生を求める渴望でなく、より過度なもの、つまり慈悲のようなキスを要求するあきあきする気持ちを起こさせたが、それは何ももの出し渋らないことによって欠乏感を作り出しているようだった。

デクスターが誇り高く、願望に満ちていた若かりし頃から、彼はずっとジュディー・ジョーンズを欲していたということを決定づけるのにそんなに時間はかからなかった。

4

こんなふうには始まった—そして強さにわずかな違いがありながらも、二人の関係が終わる間際までそんなふうが続いた。デクスターは、今まで関わってきた人の中でも非常に直接的に、無味乾燥なジュディーという人間的に魅力のある女性に自分の一部を引き渡していた。ジュディーが何を望もうとも、彼女は自分の魅力を全部発揮して追い求めていた。方法を選ばないし、策を弄して態度や効果を前もって考えたりすることもなかった—彼女の問題は精神的な面にほんの少しだけあった。ジュディーは容易に極度の身体的色気を男性に意識させた。デクスターは彼女を変える気持ちは毛頭なかった。彼女の欠点は、この欠点を超越的に、正当化する情熱的なエネルギーと絡み合っていた。

ジュディーがデクスターの肩に寄りかかってきたあの初めての夜のことだった。彼女はこうささやいた。「私、自分に何が起きているかわからないの。昨日の夜はあの人のことを愛していたと思うんだけど、今夜の私はあなたのことを愛していると思うの」デクスターは、美しくロマンティックなことを言っているように思えた。彼は自分がコントロールされて、彼女のものになる瞬間に異常に興奮した。しかし一週間後、彼はこの同じ特質を別の観点から見ると余儀なくされた。ジュディーは軽めの夕食を取るためにデクスターを自分のロードスターでピクニックに連れて行った。夕食の後、彼女は他の男を連れてロードスターと一緒に消えてしまった。デクスターは非常にパニック状態になって、とてもそこにいる人たちに対して上品に礼儀正しく接することのできる状態ではなかった。ジュディーが「他の男たちにはキスをしなかった」ということをデクスターに断言した時、彼は彼女が嘘をついているとわかっていたが、彼女がわざわざ自分に嘘をついたことは嬉しかった。

夏が終わる前に、彼が気付いた時にはもうデクスターは、ジュディーが話をして回る、代わりばしこの12人のうちのひとりとなっていた。どの人に対しても一度は他の人以上に好意を示していた。そのうちの半分はいまだに時々、感情が蘇るという悲しみに対する慰めに浸っていた。長い無視を見抜いて立ち去る兆候が見えるときはいつでも、ジュディーは、その人につかの間の甘い時間を与えた。そうして、一年、いやそれ以上つなぎとめておいた。ジュディーは無力さと悪意のない敗北の上でこれらの兆候を奪い去った。実際のところ、彼女は、自分のしたどんな茶目っ気のあることも半分無意識で行っていたのだ。

新しい男が街へやって来ると、みんな立ち去って行った。その日のデートは自動的にキャンセルされたのだ。

それはジュディーがすべて自分でしてしまったことで、どうにかしようとしても自分ではどうすることもできなかったのだ。彼女は行動的に「勝利」を手にするような女ではなかった。彼女には器用さが通じなかった。それに魅力も通じなかった。たとえ器用さがジュディーをあまりにも強く攻め立てたととしても、彼女はすぐに問題を肉体的なことを基にして解決しようとしたのだ。そして、彼女の肉体的な輝きの下で、秀才だけでなく、たくましい男までもジュディーに操られ、彼女を自分たちのものにはできなかったのだ。ジュディーはただ自分の欲望を満たし、自分自身の魅力を直接的に使うことによって楽しんでいたので。おそらく、たくさんの若かりし頃の恋愛と多くの若い頃の愛人から、自分自身は犠牲にならずに、例外なくそれらの経験の中から自分のやり方を学んでいたのだ。

デクスターの初めての歓喜の後には不安と不満が沸き上がった。ジュディーのために自分自身を失うという救いようもない恍惚感は、彼を元気づけるというよりもむしろ感覚を鈍らせたのだ。冬の間の彼の仕事にとって、この手の恍惚感がめったに襲わなかったことは幸運なことだった。知り合って最初の頃は、深く、自然と互いに惹かれ合うようだった—例えば8月初めの頃、彼女の家の薄暗いベランダで過ごした3日間は、夜遅くまで一緒にいたり、庭の塀の入り口や格子造りのあづまやのうしろで、夜通し不思議で柔らかいキスをしたりしていた。朝になると、澄み切った空気の中で日が昇り、彼女は夢を見ているような爽やかな気持ちで、彼に会うのも恥ずかしいという様子だった。これには婚約をしているような喜びがあって、ジュディーに婚約者はまだいないということに彼が気づくと、この喜びがもっと激しくなった。この3日間で、初めてデクスターはジュディーに結婚を申し込んだ。彼女は「そうね、いつかね」と言うと、「キスして」と言いながら「私、あなたと結婚したいわ」とも言い、「愛してる」—そう彼女は言った—でもそんなことに意味はなかった。

この3日間は、9月半ばにジュディーの家に来たニューヨークの男によって邪魔された。デクスターの悩みは、ジュディーとニューヨークの男が婚約したという噂だった。その男は大手信託会社の社長の息子だった。けれど、9月の終わりには、ジュディーはもううんざりしている、という知らせがあった。ある晩ダンスをしている時、ジュディーは一晩中地元の洒落男とモーターボートに座っていた。その間ニューヨークの男は必死になってクラブの中で彼女を探していた。ジュディーは地元の洒落男に彼女への訪問者—ニューヨークの男—が退屈だということを話した。2日後、ニューヨークの男は去っていった。ジュディーは駅で彼を見送って、あの男はとても悲しみに沈んでいるように見えた、と他の人に伝えていた。

そんなこんなで夏が終わった。デクスターは24歳になった。彼はますます自分の望み通りにできる地位にいた。町の二つのクラブに所属して、そのうちの一つに住んでいた。彼は決してスタッグ・ライン⁹の不可欠な部分にはいなかったけれど、ジュディー・ジョーンズがいそうなダンスパーティーには出席するようにした。デクスターは自分がその気になれば社交界に出ることだってできたのだ—今や望ましい若い男性としてダウントOWNのおじ様方に人気だった。明らかに深いジュディー・ジョーンズへの愛はむしろ彼の地位をより強固なものにした。けれど実際のところ、このことは彼の社交場における野心ではなかったし、むしろ、木曜日や土曜日のパーティーにいつも出席する男たちや、若い新婚の人たちとのディナーを一席設けようとするような人々をひどく嫌っていた。デクスターはすでに東部のニューヨークへ行こうという考えを巡らせていた。彼はジュディー・ジョーンズも一緒に連れて行きたかった。彼女が育ってきた世界についての幻滅は、彼女の望む状況についての彼の幻想を取り除くことはできなかった。

覚えておくべきことは、デクスターが彼女にしていたことがこの観点からのみ理解されるということだ。

デクスターが初めてジュディー・ジョーンズに会ってから18カ月が経ったときには、彼は他の女性と婚約していた。彼女の名前はアイリーン・シェイラーといい、彼女の父はいつもデクスターを信頼している人々の一人だった。アイリーンは金髪で優しく、立派な女性で、少し恰幅がよかった。デクスターがアイリーンに正式に求婚する以前に、彼女が結婚の申し入れを断った2人の求婚者がいた。夏、秋、冬、春、そしてまた次の夏が来て秋が来た。彼は、ジュディー・ジョーンズのわがままな唇に自分の生き生きとした生活の大部分を捧げていた。彼女は興味や、刺激、悪意や無関心、軽蔑の念をもってデクスターに接した。彼女は、おびただしいほどの数の僅かな軽蔑とそういった具合の侮蔑を加えることによって彼を苦しめた—あたかも、自分が間違いなくずっと彼のことが好きだということへの腹いせのようだった。彼女はデクスターに合図を送り、彼の前であくびをして見せ、そしてまた合図を送った。これに対してデクスターも恨みや皮肉と細めた目で返答して見せた。ジュディーは彼に無上の幸せや耐えられないほどの精神的苦痛をもたらした。彼女は彼に言い表せないほどの不快とかなりの問題を引き起こした。ジュディーはデクスターを侮辱し、踏みにじり、自分の楽しみのためにデクスターの自分への関心と彼の仕事への関心を争わせた。ジュディーは、デクスターのことを批判すること以外のすべてのことを彼に行った。そう、このことこそ、彼女が唯一しなかったことだった。批判をしないことで、ジュディーがデクスターへの完全な無関心を装っているからだと思えた。

秋が到来し、再び去っていったとき、デクスターの中にはもう、ジュディー・ジョーンズを手にすることはできないという気持ちが起こっていた。彼は自分の心を打ち負かす必要があった。しかし、とうとう、自分自身で納得させた。彼はしばらく夜になると目覚めて横になって、このことについて自問自答し始めた。デクスターは自分にこの問題や彼女が彼に与えた痛みについて心の中で唱えた。自分の妻として、彼女の紛れもない欠如を数え上げた。その上で、デクスターは自分はジュディーのことを愛しているのだということをつぶやいた。そしていつかしてから、彼は眠りに落ちたのだ。それから一週間、電話越しに聞こえる彼女のハスキーな声やランチの時に彼を見つ

⁹ ダンスの相手がない人たちがかたまっていること。

める目を想像しないように、デクスターは遅くまで仕事に熱中し、夜には、自分のオフィスに行き、将来の構想を練っていた。

週の終わり、デクスターはダンスパーティーに行き、一度だけジュディー・ジョーンズからダンスのパートナーを奪った。彼らが初めて会って以降、初めて彼のほうから一緒に隣同士に座ることも、彼女に美しいと言うこともしなかった。このことをジュディーが寂しいと思わなかったことが彼を傷つけたのだった。これがすべてだった。その晩、デクスターはジュディーが新しい男性といえどもなんとも思わなかった。彼は随分前から何も思わなくなっていた。

デクスターは遅くまでダンスパーティーにいた。彼は一時間ほどアイリーン・シェイラーと一緒にいて、本や音楽の話をした。彼はどちらのことについてもほとんど知らなかった。しかし、デクスターは今や自分の時間は自分で支配できるようになっていた。そして、彼は、男というものは一若くて、桁外れの成功をしたデクスター・グリーンのような—この手のことについてもっと知っておくべきだ—という堅苦しい考えを持っていた。

10月になって、デクスターは25歳になった。1月にデクスターとアイリーンは婚約した。6月には正式に発表する予定だった。そして、その3か月後には結婚する予定だったのだ。

ミネソタの冬は果てしなく長かった。そして、5月になったころには、風は優しく吹き付け、雪はとうとうブラックベアー湖に溶け落ちていた。初めてのことだが、デクスターはもう1年以上確かな精神の静寂というものを楽しんでいた。ジュディー・ジョーンズはフロリダにいて、その後、ホットスプリングスというところにおいて、どこかで婚約をして、またどこかで破綻していた。最初のころ、デクスターが彼女のことを完全にあきらめていた時、人々がデクスターとジュディーがいまだに付き合っていると思っていて、彼女の動向について尋ねていたことが彼を悲しくさせた。しかし、デクスターがアイリーンと夕食の席を一緒にするようになってからは、人々はもうジュディーについて尋ねることはしなかった。逆に、彼らのほうからジュディーについて彼に話してきた。デクスターは彼女についての権威者であることをやめたのだった。

ついに5月になった。デクスターは夜道を歩いていた。雨で湿った暗闇の中で、もうすぐかなと思いつつも達成したことはあまりに少なく、あまりにも多くの恍惚感が彼の中から去っていったものだと考えていた。去年の5月は、ジュディーの強烈で、許しがたいもののそれを彼が許してしまう混乱の虜になっていた。この時はまれな時の一つだったんだ。彼は彼女が自分のことを好きになっていると思いつ込んでいた。このほんの僅かな幸せも彼は大量に使い果たしてしまった。デクスターは、アイリーンが彼の後ろに広げられたカーテンであり、光輝くティーカップの間を動く手、そして子供を呼びかける声に過ぎないということを知っていた。・・・情熱や愛らしさは去っていた一夜の魔力、様々に移り変わる時や季節・・・そしてほっそりとした唇が折り返し、彼の唇の上に落ち、彼を天国へと誘う。こんなことがデクスターの心の奥底にあった。彼にはこのことがあまりにも強烈すぎて、簡単に忘れることはできなかった。

真夏になる前の落ち着いた数日間が続いていた5月の中旬、彼は夜になってアイリーンの家に立ち寄った。彼らの婚約は今や、後一週間で発表することになっていた。誰もこのことに驚く者はいなかっただろう。そして今夜彼らは大学のクラブのラウンジで一緒に座って、一時間ほどダンサーたちを見るつもりだった。アイリーンと行くことは彼に健全さをもたらしていた。彼女はとてもしっかりとしていて、人気者で、非常に「すばらしい」女性だった。

デクスターは赤褐色の砂岩の家の階段を昇り、中へと入っていった。

「アイリーン」と彼は呼びかけた。

シェイラー夫人がデクスターに会うために、居間へ出てきた。

「デクスター」と彼女は言った。

「アイリーンはひどい頭痛で二階にいるの。彼女はあなたと一緒にパーティーに行きたがっていたけれど、私がベッドに寝かせていたの」

「何も深刻な状況というわけではないんですね。僕は・・・」

「何も問題ないわ。だって彼女は明日の朝、あなたとゴルフに行くつもりですよ。だから今夜ばかりはちょっと彼女に時間をちょうだい、デクスター、いいかしら」

彼女の笑みは優しかった。夫人とデクスターはお互いに気に入っていた。居間で少しだけ話したあと、彼は「おやすみなさい」と言った。

自分の部屋がある大学のクラブに戻り、彼は少しの間、出入り口の所に立ち、ダンサーたちを見ている。彼は戸口の側柱に寄りかかり、一人二人に会釈をし、あくびをした。

「こんにちは。愛しい人」

肘の方から聞きなれた声がして彼は驚いた。ジュディー・ジョーンズは男性を置き去りにして、デクスターの方へと部屋を横切った。ジュディー・ジョーンズ。彼女は、金色の服をまとった細身のエナメル色に塗られた人形のようなようだった。髪を束ねている紐やドレスの裾から見える二つのスリッパも金色だった。彼女の顔のひよわな頬の赤身はデクスターに微笑みかける時に開花するようだった。暖かく、好奇心な風が部屋を通過して吹いていった。彼は、ディナージャケットのポケットの中の自分の手を取りとめもなくしっかりと握りしめた。デクスターは突然の興奮に満たされていた。

「いつ戻ってきたの」デクスターは何気ない感じで尋ねた。

「こっちに来て。そのことについて話しましょう」

彼女は向きを変え、デクスターは彼女についていった。彼女は遠くにいたけど一戻ってきたんだという素晴らしい出来事に彼は涙が出そうだった。彼女は刺激的な音楽が奏でられている魅力的な通りを歩いていった。彼女と共に去ってしまっていたすべての不思議なこと、そしてすべての生き生きとしていて元気を与えてくれる希望がこの女性と共に戻ってきたのだ。

彼女は出入り口から入っていった。

「ここに車を持ってきているの？あなたがないって言うなら、私が持つてるわ」

「僕はクーペを持っているよ」

そうすると、彼女は金色の服でサラサラと音を立てて車の中に入っていた。そして、彼はドアをバタンと閉めた。彼女はいろんな種類のたくさんの車に乗った—こんなふうにあるいは、こんなふう。革のシートにもたれかかって。そう、ドアの所に肘をかけて、待っていたんだ。彼女自身以外で彼女を汚す何かがある以前からジュディーは汚されていたのかもしれない。しかしこれはジュディー自身から溢れ出ているものだった。

やっとの思いで彼は無理に車を走らせ、通りへ戻った。こんなことは何でもないとおかなくなければならない。彼女はこんなこと、以前もしたし、自分の帳簿から悪い請求書を消したかのように、僕は彼女のことをどこか背後に置いてきたはずだ。

デクスターはダウントウンをゆっくりと走り、放心状態に侵され、ビジネス街の人通りの少ない通りを横切ったが、映画館から追い出された人や、賭博場でぶらぶらと時間を過ごしているような破壊的で喧嘩好きの若者たちがあちらこちらにいた。バーやガラスの回廊や黄色い光が漏れ出す回廊からグラスのカチンとあたる音や手をぴしゃりとたたき音が聞こえてきた。

彼女は顔を近づけて彼のことを見ていた。その静けさが何とも厄介だった。でも、この重大な局面でも彼にはこの時間をうまく切り抜けるためのあたりさわりのない言葉は出てこなかった。ちょうどいい曲がり角で、彼は大学のクラブに向かってジグザグに戻り始めた。

「デクスター、私のことが恋しかった？」彼女は突然尋ねてきた。

「誰だって君のことが恋しいよ」

デクスターは彼女がアイリーン・シェイラーのことを知っているか半信半疑だった。ジュディーは一日前に戻ってきた。彼女がいなかった時期は、デクスターとアイリーンの婚約と同時期だった。「なんてことのなの」ジュディーは悲しげに笑い声をあげた—悲しみの色は見えなかったが、彼女はじっと彼のほうを見ていた。彼はダッシュボードに夢中になっていた。

「あなたは以前よりハンサムね」彼女は物思いにふけたように言った。「デクスター、あなたって忘れられない目をしているわよね」

彼はこの時に笑いそうになったが、笑わなかった。この手のことは大学2年生の時に言われていたことだった。だけれども、いまだに彼の心に鋭く刺さってきたのだ。

「私はもう、すべてのことにひどく疲れ果ててしまったわ、ダーリン」彼女は誰にでも「ダーリン」と言って、ぶっきらぼうに個々人への友情として愛情表現をしていた。

「私、あなたと結婚したいわ」

単刀直入の言葉が彼を混乱させた。デクスターは彼女に他の女性と結婚するのだということをすぐに伝えるべきだったのだが、そうはできなかった。婚約のことが言えるくらいなら、君のことは愛していないと言うことは、いとも簡単なことだった。

「私たち、うまくやっていけると思うの」彼女は同じ調子で「あなたが私のことを忘れていなくて、それに、他の女の子と恋に落ちていない限りね」

彼女の自信は、明らかに偉大なものだった。彼女は言っていたんだ、要するに、この手のことは信じられないとわかっていたし、これが真実だとしても、彼にとってはたかが大人げない無分別な行動を犯したに過ぎないことだった。もしかすると見せびらかす可能性もあっただろう。彼女は彼のことを許すに違いない、というのも、それは一瞬の問題ではなかった、むしろ軽く脇に払いのけてしまうようなものだった。

「もちろん、あなたは他の誰でもない私を愛しているのだけれどもね」と言い「私はあなたの私への愛情の送り方が好きよ。ねえ、デクスター、去年のこと、忘れちゃったの？」と話を続けた。

「忘れるはずがないよ」

「私もよ」

彼女が心から動いたのか、それとも、彼女は自分自身の行動の波によって感服させられたのか。「私、もう一度、あんな風にできたらなあ」と彼女は言った。デクスターも答えるように強いられた。「僕は、もう一度戻れるなんて思わないよ」

「私もそうだと思うわ・・・私、聞いたの。あなたがアイリーン・シェイラーにデレデレだってい

うことをね」

その名前を強調することはほとんどなかったけれども、デクスターは突然恥ずかしくなった。「ねえ、私を家まで送ってくれない」とジュディーは突然泣き出した。「ばかみたいなダンスパーティーには戻りたくないの—あんな子供みたいな人たちと」

そして、彼は住宅の方へと向かうために道を戻ると、ジュディーは静かに泣き始めた。彼はこれまで彼女が泣くところを見たことがなかった。

暗い通りにぼつぼつと明かりが見え、大豪邸がぼんやりと見え始めた。デクスターは眠ったように静かで、ゴージャズなモーティマー・ジョーンズの白い大豪邸の前でクーペを止めた。あたりは湿った月光で満たされていた。しっかりとした壁、硬い梁、その雄大さ、光、華やかさは、彼の横にいる若くて美しい人との対照を引き出してくれるだけだった。この豪邸は彼女のはかなさを目立たせるのに十分なほどがっしりしていた。それはあたかもそよ風が蝶の羽によって引き起こされるかのようだった。彼は静かに突っ立っていた。彼の神経は荒れ騒いだ状態で、自分がもし動いて、その腕が思わず彼女に触れてしまったらと恐れていた。二つの涙の粒が彼女の頬をつたい、彼女の上唇も震えていた。

「私は他のどんな女性よりも美しいわ」

彼女は途切れ途切れに言った。

「なんで私は幸せになれないのかしら」彼女の潤った目が彼の安定性を破壊したのだった。彼女の口は妖美な悲しみと共にゆっくりと下向きになった。

「あなたが私を自分のものにしてくれるのなら、私はあなたと結婚したいのに。あなたは私を価値のない人だと思っていると思う。でも、私はあなたのためならもっと美しくなれるのよ。デクスター」

何百万という怒り、誇り、情熱、憎しみ、優しさの言葉が彼の唇の上で格闘していた。そして、感情の完璧な波が彼を洗い流し、知恵、感情、疑い、名声の塊を奪った。これこそ、今まさに話している女であり、彼のものであり、美德、そして誇りだった。

「入らない？」彼はジュディーがはっきりと息を吸い込むのを聞いた。

少し間があった。

「わかったよ」

デクスターの声は震えていた。

「行くよ」

5

おかしいことに、デクスターはあの夜が終わって長い時間が経っても、その夜の事を後悔しなかった。10年という年月からあのひとときの事を考えると、ジュディーのデクスターに対する情熱がたった1か月しか持たなかったという事実は、くだらないことのように感じた。デクスターの従順さによる問題ではなく、最終的に彼は自分自身に激しい苦痛を受けさせたのだ。そして、アイリーンと彼に力を貸してくれたアイリーンの両親に深刻な精神的苦痛を与えたのだ。彼女の悲しみは絵に描いたようなものではなかったのだ。

デクスターは実際のところ心は折れていなかった。彼の行動に対する町の人々の意見は、デクス

ターにとって全く重要でなかった。というのも、それは何も彼がこの町を去るからというわけではなく、この状況についての外面は薄っぺらに見えたのだ。この男は全く世俗の意見に興味がなかった。もうどうしようもないということと、自分には本来人を動かす力がなく、ジュディー・ジョーンズを捕まえる力がなかったのだとわかった時に彼は彼女に対する恨みを抱くことはなかった。デクスターはジュディーを愛していた。彼女を愛するには年を食い過ぎていた。あの日まではジュディーのことを愛していたのに。けれど、彼は彼女を自分のものにできなかった。だから、デクスターは強さのためだけに運命づけられている深い痛みを味わったのだ。それはつかの間の深い幸福を味わったのと同じことだった。

ジュディーがデクスターとアイリーンの婚約を終わらせた理由、それはつまり、ジュディーはアイリーンから彼を奪いたい、というわけではなかった。ジュディーという女性は他の何物も欲しがらなかった。そしてデクスターに不快感を抱かせなかった。究極的な嘘をついたとしても、デクスターの中でどんな反感も驚きも超越していた。

デクスターは、2月に洗濯事業の拡大とニューヨークへ移り住むために東部を訪れた。しかし、3月にはアメリカで戦争が起こり、彼は計画を変更した。西部に戻り、彼は、パートナーに事業経営書を手渡し、4月下旬に一等航海士のトレーニングキャンプに入った。彼は確かな信念の基で戦争に向かう若者の一人だった。そして彼はもつれた感情の蜘蛛の巣から解放されることを望んでいたのだ。

6

この話はデクスターの自伝ではない。覚えていてほしいことは、これはデクスターが若いころに抱いた夢と関係のない方へと広がっていった。私たちは今や大方、彼の描いていた夢と彼自身のことを見終えたのだった。ここに関係する問題はあとひとつだ。それは7年後に起こるのだった。

それはニューヨークで起こった。ニューヨークは彼がうまくやった場所だ。成功した場所だったから、彼にとってなんの高すぎる障壁なんてなかった。デクスターは32歳になった。戦後すぐの慌ただしい旅を除いて、彼は7年間西部にいなかった。デトロイトからやってきたデブリンという男が取引のため彼のオフィスに会いに来た。そこで一つの問題が起こったのだ。要するに、この出来事が彼の人生の特定の局面を終わらせたのだった。

「それであなたは中東部の出身なんですよ」

十分な注意もせずただの好奇心でデブリンという男は尋ねてきた。

「これはおかしいことがあるものですね。あなたみたいな男性はおそらくウォール街で生まれ育ったと思っていましたよ。そうそう、デトロイトにいる私の友人の妻もあなたと同じ町の出身なんですよ。私は結婚式でアッシャー¹⁰をしたんです」

デクスターは次に来る言葉を何気なく待っていた。

「ジュディー・シムズ」デブリンは特別な興味があるわけでもなく言った。「結婚する前はジュディー・ジョーンズという名前だったんです」

「ええ、私は彼女のことを知っていますよ」

¹⁰ 結婚式で花婿のサポートをする。

ほんやりとした切望が彼の中に広がった。デクスターはもちろんジュディーが結婚したことを聞いていた。このことを初めて知ったとき、わざとそれ以上は聞かなかったのだ。

「とても素敵な女性です」

何の意味もなくデブリンは考え込んだ。

「でも私は彼女を気の毒に思うんです」

「どういうことですか」

彼の中にある何かが反応して、前のめりになった。

「ラド・シムズはどこらそこらと立ち去ってしまうんです。あの男が彼女に虐待をしているというわけではないんだけど、やつは飲んだくれて、ふらふらしているんですよ」

「ジュディーはうろうろしないんですか」

「いや、彼女は子供たちと一緒に家にいますよ」

「そうか・・・」

「彼女はラドには年を取りすぎています」

「年を取りすぎているだって！」

デクスターは声を上げた。

「どういうことです、彼女はまだ27歳でしょう」

彼は通りに逃げ出して、デトロイト行きの電車に乗ってしまいたいぐらいの興奮した考えを持っていた。そして、突然立ち上がってしまった。

「お忙しいようですね」

デブリンはすぐに謝り

「私としたことが気づかずに・・・」

と続けて言った。

「いいや、私は忙しくないんです。全く忙しくないんです。あなたは彼女が27歳って言ってましたよね。いや、私が彼女のことを27歳だといったんだ」

「そうです。あなたがおっしゃったんです」

デブリンはさりげなく同意した。

「話を続けて、続けてください」

「どういうことですか」

「ジュディー・ジョーンズのことでですよ」

デブリンはどうしようもない状態でじっとみた。

「そう言われても、私があなたに話したそれだけのことでですよ。ラド・シムズは彼女のことを悪魔のように扱っているんです。離婚したりなにかが起こったりすることはないだろうけど。あの男が極めてひどいことをしたときでも彼女は許してしまうんです。要するに、私はジュディーがラドのことを愛していると思うんです。彼女が初めてデトロイトに来た時は本当にかわいい女性でしたよ」

かわいい女性だって！そのバカげたような言葉がデクスターの心に突き刺さった。

「もう彼女はかわいい女性じゃないんですか」

「そんなことはないですよ」

「ちょっと待ってください」突然座りながらデクスターは言った。

「私にはわからないんですよ。あなたがジュディーのことを「かわいい女性だ」というのも「そんなことはない」というのも。あなたの言っていることがわからない。ジュディー・ジョーンズはかわいい女性ではなかった。ともかくね、彼女は見事な美しさだったよ。なんで私が彼女のことを知っているかって。知っているかって」

デブリンは楽しそうに笑っていた。

「私は何も漕ぎ出そうとしているのではないですよ」

「私はジュディーは素敵な女性だと思うし、タイプですよ。なんで、ラド・シムズみたいな男が気が狂ったように彼女と恋に落ちたのか理解できないですよ」

そして、

「たいていの女性が彼女みたいですけどね」

デクスターはデブリンをまじまじと見て、この男性に宿る無神経さや特定の恨みの理由があるに違いないとむやみやたらに考えていた。

「多くの女性がこんな風に消えていくんですよ」

デブリンは指をパチンと鳴らし、

「あなたもこんなことに出くわしたことがあるに違いありませんよ。おそらく、私は彼女が結婚式の時、どんなにかわいらしかったか忘れてしまったけれど。結婚式以来、私は彼女のことを長らく知っているけど、あなたもご存じの通り、彼女はいい目をしていますよね」

ある種のどんよりしたものが彼にのしかかってきた。彼のこれまでの人生で初めて、非常に酔いたい気持ちになった。デクスターは自分がデブリンの言ったことに大声で笑い声をあげていることに気づいていた。だけど、何が面白くて笑っているかはわからなかった。いつかしてデブリンが去ったとき、デクスターはラウンジに横たわり太陽がうっとうしくも愛らしいピンクと金色を見せながらニューヨークの地平線に沈んでいくのを窓越しに見ていた。

デクスターは失うものなんてないと思っていた。彼はとうとう傷つかなかった。しかし、彼はただなぜかそれ以上のものを失ってしまったことに気付いた。それはまるでジュディー・ジョーンズと結婚して、彼の目の前から消えてしまったようだった。

夢は破れたのだ。何かが彼からその夢を奪い取ってしまったのだ。一種の混乱でデクスターは自分の目を掌で押し付けた。そしてシェリーアイランドや月明かりのベランダ、ゴルフ場のギンガム、乾いた太陽、そして彼女の首元にやさしく落ちていた金色の襟が水面下で映像として蘇ってきた。ジュディーの唇で彼のキスは湿り、彼女の目は憂鬱さやあの日の朝の新しい上質なりネンのような初々しさを持ちながらも悲嘆にくれていた。なぜなのだろうか。こんなこと、もうこれ以上この世で起こることではないんだ。こんなことはこれまで目の前に存在したことなのに、もうこれ以上存在することなんてありやしないのに。

ここ数年のうちで初めて涙が頬をつたっていった。けれども今回は自分のための涙だった。彼は口も目も震える手も気にしなかった。気にしたかったけれど、彼は気にすることができなかった。もうデクスターは消えてしまったから、もうこれ以上後戻りはできなかった。門は閉ざされていた。太陽は沈んだ。常に耐えている鋼鉄の灰色の美しさ以外、美しさのかけらもなかった。デクスターが抱いていたに違いない恨みでさえ、国の幻、若さ、人生の豊さ、そして彼の「冬の夢」を謳歌さ

せてくれた場所の背後に置き去りにされてしまった。

「ずっと前」彼は言った。「ずっと前。何かは僕の中にあったんだ。でも、その何かが消えてしまったんだ。そう、もう今となつては消えてしまったんだ。もうないんだ。そんなことなくなつてしまったんだ。泣けるわけないんだ。そんなこと気にしないよ。だって、こんなことが戻ってくることなんてないんだ」

From *All the Sad Young Men* (1926). New York: Scribner

付記

フィッツジェラルドの妻ゼルダは、フィッツジェラルドが女性について人とは違った考え方を持っていると主張している。その証拠として彼が “He says that all women over thirty-five should be murdered.” (Brucoli and Baughman 2004: 58) と述べていたと言うのだ。35歳を過ぎてしまえば、女性としての魅力がなくなってしまうとでも言いたかったのだろうか。ゼルダの言葉を真に受けてしまえば議論的になりかねないが、このことについてフィッツジェラルドは、“I mean the women who, without any of the prerogatives of youth and beauty, demand continual slavery from their men,” (Brucoli and Baughman 2004: 58) と弁明している。「冬の夢」に登場するジュディー・ジョーンズは10代前半の頃から「相手を魅了する年齢に似合わない色気」を兼ね備えた人物だ。それは生まれつき備わっているものであって、恐ろしいことを無意識に行ってしまうのだ。そんな女性に振り回されてしまう人物の一人として主人公デクスターが描かれている。フィッツジェラルドの言う若さ、そして美しさに匹敵する人物こそがジュディーなのだ。

また、『偉大なるギャツビー』では、主人公ギャツビーが、思いを寄せているデイジーを自分のものにするという成功の夢を追い求めている様子も描かれている。デイジーはあたかもギャツビーに傾いているようにみせかけながらも、結局は自分の安定した生活を取る。デイジーの真意を探ることは難しいが、彼女には豊かな生活のために自分の本当の思いを押し殺している側面があるだろう。この行為も彼女が女性であることの特権を利用して生き残っていくための術なのだ。

フィッツジェラルドが作品の中で描く女性には、女性であることの魅力を大いに発揮し、それを生き残るための術とした人物が描かれている。そして彼は、実生活の中で女性に対して抱いていた感情をそのまま作品にも投影したとも言える。フィッツジェラルドの描く女性は、男性にモテることを狙ったわけでもない。ある意味罪のない行動をしているのだ。その行動によって男性が悲劇のヒロインならぬヒーローとなっている。デクスターやギャツビーのような悲劇のヒーローが、思いを寄せる女性を手にするのができなかつたという悲しい結末に対し読者に同情を求めている側面もあるのではないだろうか。

Brucoli, Matthew J., and Judith S. Baughman (Eds.) (2004). *Conversations with F. Scott Fitzgerald*. Mississippi: University Press of Mississippi.